

幼児期から小・中学校各学年における児童生徒の学校生活の状況について

		幼稚園・保育所・認定こども園	小学校						中学校		
		年長児の概況	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年
学級編制	1学級当りの上限人数	園により1学級あたりの幼児数や担任の数は異なる例) ・幼児24人に対し担任2人 ・幼児30人に対し担任1人 ・3～5歳の縦割り保育を実施、幼児25人に対し担任3人等	30			35			35		
	クラス替え等		他の園から入学した児童との人間関係		複数学級の場合 クラス替え		複数学級の場合 クラス替え		他の学校から入学した生徒との人間関係	複数学級の場合 クラス替え	複数学級の場合 クラス替え
学習内容	標準授業時数	園により1日の生活の仕方は異なる例) ・午前3時間程度、体操、制作、英語等の、集団での活動を実施 ・午前1.5時間程度、体育、英語等の、集団での活動を実施 ・着席してクラス単位で行う活動は設定しない等	850	910	980	1015			1015		
	授業の単位数 時間		45						50		
	教科等の数		8		11		12		12		
学習以外	人間関係・役割	・支援を要する幼児に対して、加配措置を行っている自治体がある。 ・公私立を対象としている自治体、公立のみを対象としている自治体がある。 ・基本的には、診断や判定を受けている幼児が対象であるが、保護者の心情に配慮し、元保育所長等の職員が様子を見て加配を判断する自治体もある。					高学年としての役割 縦割り、委員会、クラブ活動等	部活動（先輩後輩） 順位による成績			
	生活等の変化		時間割に沿った授業 学習規律 児童のみでの登下校			学習内容の抽象化			校則 教科担任制	第2学年後半から 進路選択	進路選択
中央教育審議会 答申より 第2部 第1章 各学校段階の教育課程の基本的な枠組みと、学校段階間の接続 (H28.12.12) (抜粋) 学習指導要領等の改訂		・この時期に育みたい資質・能力は、小学校以降のような、いわゆる教科指導で育むのではなく、幼児の自発的な活動である遊びや生活の中で、感性を働かせてよさや美しさを感じ取ったり、不思議さに気付いたり、できるようになったことなどを使いながら、試したり、いろいろな方法を工夫したりすることなどを通じて育むことが受容である。(P.74) ・2018年から幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領の3才以上について保育内容が共通化され、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が示された。育った力を生かすため、幼児教育と小学校教育の円滑な接続が求められている。	・低学年においては、その2年間で生じた学力差が、その後の学力差の拡大に大きく影響しているとの課題が指摘されている。 ・中学年以降の学習の素地を形成していくとともに、一人一人のつまずきを早期に見出し、指導上の配慮を行っていくことが重要となる。(P.84) ・令和2年度から新学習指導要領が実施され、生活科を中心とした「スタートカリキュラム」において、幼児期に育まれた資質・能力が発揮できるような取組が求められている。	・具体的な活動や体験を通じて低学年で身に付けたことを、より各教科等の特質に応じた学びにつなげていく時期である。 ・例えば国語科における言葉の働きについても、低学年における「事物の内容を表す働き」等に加えて、「考えたことや思ったことを表す働き」があることに気付くなど、指導事項も次第に抽象的な内容に近づいていく段階であり、そうした内容を扱う学習に円滑に移行できるような指導上の配慮が課題となる。(P.84)	・高学年においては、子ども達の抽象的な思考力が高まる時期であり、教科等の学習内容の理解をより深め、育成を目指す資質・能力の育成に確実につなげるためには、指導の専門性の強化が課題となっている。 ・様々な生徒指導上の課題が早期化し、中学校からではなく、小学校高学年からの対応が必要となっているとの指摘もある。(P.84)	・中学校教育には、教科担任による各教科等の専門性を踏まえた指導を通じて、小学校教育の成果を受け継ぎ、義務教育9年間の集大成として、必要な資質・能力として確実に育てていくとともに、生徒一人一人の興味や関心に応じた学びを深め広げ、自らのキャリア形成の方向性を見だし、高等学校教育等のその後の学びにつなげていくという、極めて重要な役割が期待されている。(P.98) ・令和3年度から新学習指導要領が実施される。					
重 子 視 ど も の 発 達 課 題 よ り の 文 特 科 省 と 報 告	発達段階	乳幼児期	学童期				青年前期				
	各段階における子どもの発達において重視すべき課題 (抜粋)	・愛着の形成 ・人に対する基本的信頼感の獲得 ・基本的な生活習慣の形成 ・十分な自己の発揮と他者の受容による自己肯定感の獲得 ・道徳性や社会性の芽生えとなる遊びなどを通じた子ども同士の体験活動の充実	低学年	高学年			中学校				
実態 (抜粋)		・小1プロブレム（子どもが社会性を十分身につけることができないまま小学校に入学することにより、精神的にも不安定さをもち、周りの児童との人間関係をうまく構築できず集団生活になじめない）	・「人として、行ってはならないこと」についての知識と感性の涵養や、集団や社会のルールを守る態度など、善悪の判断や規範意識の基礎の形成 ・自然や美しいものに感動する心などの育成（情操の涵養）	・抽象的な思考の次元への適応や他者の視点に対する理解 ・自己肯定感の育成 ・自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養 ・集団における役割の自覚や主体的な責任意識の育成 ・体験活動の実施など実社会への興味・関心を持つきっかけづくり	・9歳の壁（自分のことも客観的にとらえられるようになるが、一方、発達の個人差も顕著になる） ・自尊心の低下などにより劣等感を持ちやすくなる時期でもある。 ・ギャングエイジ（閉鎖的な子どもの仲間集団の発生が見られる）	・生徒指導に関する問題行動などが表出しやすいのが、思春期を迎えるこの時期の特徴 ・不登校の子ども割合が大幅に増加する傾向や、さらには、青年期すべてに共通するひきこもりの増加といった傾向などが見られる。					
その他					・小4ビハインド（小4での算数のつまずきがその後の算数数学の習得を困難にしている）	・中1ギャップ					